慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小野塚知二・沼尻晃伸編著『大塚久雄『共同体の基礎理論』を読み直す』
Sub Title	
Author	寺出, 道雄(Terade, Michio)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2007
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.100, No.2 (2007. 7) ,p.561(125)- 565(129)
JaLC DOI	10.14991/001.20070701-0125
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20070701-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」100巻2号（2007年7月）

書評

小野塚知二・沼尻晃伸編著

『大塚久雄『共同体の基礎理論』を読み直す』

日本経済評論社，2007年4月，240頁

1

「あとがき」（伊藤正直）によれば，本書は，2006年に，「『共同体の基礎理論』を読み直す——共同性と公共性の意味をめぐって——」と題しておこなわれた，政治経済学・経済史学会春季総合研究会の記録をもとに各報告者が加筆したものである。そうした主題の設定の根底には，現代社会において「共同性」や「公共性」をいかに構想していくのか，という関心があったのだという。

まず，本書の概要を紹介しよう。

序章「『共同体の基礎理論』を読み直す」（小野塚知二）では，大塚久雄の著書である『共同体の基礎理論』（以下『基礎理論』）（1955年）の概要が紹介されたのち，『基礎理論』が，もはや「省みられない古典」となってしまったこと，かつては厳しい批判にさらされた書物でもあったことが指摘される。しかし，そうしたもとで，極度に「寄る辺なき社会」と化した現代社会の今後を見据えるためには，その『基礎理論』を読み直すべきであることが提唱される。

こうした序章を受けて，以下，本論として，前述の研究会での報告をもとにした，多様な専門分野の五人の著者の五つの論考が掲載される。ここでは，主には，各著者の『基礎理論』の読みそのものについてではなく，彼らのポジティヴな主張について紹介する。

第1章は，「『共同体の基礎理論』の現代的位相」（黒瀧秀久）である。

黒瀧の主張の要点は，大塚が『基礎理論』の刊行の後におこなった「新しい共同体」の再構成という提唱に着目して，その提唱を，今日的なコミューン，コミュニティ，コモンズの視点のもとで捉え直していくべきであるということである。黒瀧は，そうした捉え直しのためのコンセプトとして，エコマネー，地産地消，産消提携，CSA（コミュニティー・サポーティッド・アグリカルチャー）等をあげる。

第2章は，「現代における「農業共同体」の性格と機能」（荒井聡）である。

荒井は，広い意味での村落共同体が，近現代の日本にもかつて存在し，現在も存在していることを述べ，そうした視点から，現代日本の農業集落の様相を分析する。荒井も，黒瀧と同じく，「新しい共同体」の再構成を構想している。黒瀧と荒井による日本の農村の将来構想はほぼ同一であるといってよいのであろう。その両者それぞれの特質は，黒瀧がそれを抽象的な概念から出発した，トップ・ダウン型の議論によって導きだしているのに対して，荒井はそれを現状記述から出発した，ボトム・アップ型の議論によって導きだしていることであると要約しうる。

第3章は，「日本近世村落史からみた大塚共同体論」（渡辺尚志）である。

渡辺は，実証の立場からのさまざまな限定を加えながらも，大塚による共同体の分析の二つの視点を肯定的に受けとめる。すなわち，土地所有の分析を基礎として共同体論を構築していくという視点と，共同体がはらむ共同体的要素と私的要素という，「固有の二元性」の展開の過程として，その動態を解明していくという視点である。

渡辺は，そうした二つの視点から，日本の近世共同体の性格をスケッチする。

渡辺の理解の特徴は，前者の視点からは，大塚が捨象した領主的土地所有の存在を再考して，近世の土地所有を，領主と百姓とによる重層的な所有として理解すべきであるとすることと，今日の

近世史研究が軽視する共同体の存在を再考して，入会地などについてのみでなく，耕地・屋敷地についても，共同体的土地所有の存在を認めるべきであるとすることである。渡辺によれば，「村」の耕地は，個々の「家」のものであると同時に「村」全体のものであった。また，後者の視点からは，共同体が，商品経済の発展過程に対して，大塚がそう理解したように，それを抑止する役割というよりは，それを積極的に助ける役割を果たした点に注目すべきであるとすることである。

そして，渡辺は，以上のような日本の近世共同体の理解を基礎として，大塚の共同体論を理論的に再検討する必要があることを指摘する。

第4章は，「大塚久雄と近代中国農村研究」（三品英憲）である。

三品は，第二次世界大戦中に，中国農村の性格規定をめぐっておこなわれた「平野—戒能論争」に着目する。その論争で，平野義太郎は中国農村の共同体的性格を強調した。そして，平野は，その日本と中国とに共通する農村社会の共同体的性格を紐帯として，アジアは，社会の共同体的構成を欠く欧米と対抗すべきことを説いた。いわゆる「大アジア主義」である。これに対して，戒能通孝は，中国農村の共同体的性格そのものを否定した。戒能によれば，中国の農村は，村落共同体を決定的に欠いた社会であった。それは，封建制の存在を前提として，農民たちがその封建領主の支配に対する共同の防壁として村落共同体を作りだしていった，日本やヨーロッパの農村社会とはまったく異質な存在であった。

三品は，大塚の日本認識は，「大アジア主義」者となった平野と同型のものであったと規定する。大塚と平野は，日本と中国がともに社会が共同体的に構成されていたことを強調する，〈ヨーロッパ⇔アジア（日本）〉型の日本認識の持ち主であったとするのである。もちろん，三品は，大塚が目指したのは，あくまでも共同体の解体の上に成立する近代社会であったことを指摘し，社会の共同体的な構成を，「近代の超克」を目指す上での積極的な特質であるとした，平野のそれとは対照的であったことを指摘するのではあるが。

そして，中国農村の性格の理解において平野にではなく戒能に同意する三品は，大塚が，村落共同体を欠いた前近代社会である中国を視野に入れそこなったことは，その近代理解や共同体理解に大きな問題をもたらすことになったと指摘する。

第5章は，「共同体の「ゲルマン的形態」再考——静態モデルから動態モデルへ——」（飯田恭）である。

飯田は，ドイツ農村史についての実証研究をふまえながら，大塚の「ゲルマン的共同体」概念，ひいてはそうした共同体的関係の解体を分水嶺として，前近代と近代とに歴史をきれいに二分する歴史像を再検討する。その場合，飯田は，大塚による共同体の静態的な分析に，土地の移転を視野に入れた動態的な分析を対置するとともに，やはり大塚による領主制の存在を捨象した分析に，その存在を組み入れた分析を対置する。

飯田は，動態的な分析によれば，以下のような知見が得られるとする。

「階級社会」の形成は，封建制が早期に弛緩し，土地市場の発展が進んだ地域よりも，封建制が強く残存し，土地市場の発展が遅れた地域において早く進んだ。これは，後者において農場不分割制（一子相続制）が存在したからである。そこでは，一六世紀以降の人口の増大によって農地開発が限界に達したとき，小屋住み層が広汎に形成されていった。こうした事態は，共同体的関係の内部で農民の階級分化が進んだことを意味している。それは，共同体的関係の崩壊過程で土地無し層が生れてくるという，大塚の近代化理解とは異なった様相であった。

また，領主制の存在を組み入れた分析によれば，以下のような知見が得られるとする。

エルベ以東のグーツヘルシャフト地帯を対象とした分析によれば，領主は，農場を維持するのに十分な「財産と能力」をもつ農民のみに農場の保有を認めた。このことは，他の共同体の構成員の

共同体への参入や，共同体の構成員の強制退出という事態を生んだ。こうした事態は，土地市場が未発達なもとでも，封建領主の農民人事を通じて土地が流動化していたことをしめしている。それは，共同体内部における商品経済の発展が共同体の封鎖性を崩していったという，大塚の近代化理解とは異なった様相であった。

飯田は，こうした点からすれば，封建制の発展過程そのものの中で，資本主義社会の基本要素のいくつかが同時平行的に形成されていったことになると指摘する。

以上の五つの章に次いで，終章「結語——共同性と公共性の関係をめぐって——」（沼尻晃伸）では，本論五編の総括がおこなわれるとともに，副題にある視点から，近現代日本史研究の研究史が回顧される。

沼尻は，その回顧から，近現代の日本において，私的な土地所有が，国家の法と広い意味での共同体的関係の狭間で，いかに「社会性」を備えていったかを分析する必要があることを指摘する。

終章の後には，前記の研究会の「討論記録」と，付論的な小論「ピエール・ユーリと共同体論——討論を踏まえての感想——」（藤田憲）が掲載されている。

2

(1)　序章の著者（小野塚）がいうように，『基礎理論』は，かつては，経済史の専門家にも，そして経済史の専門家を越えた広い読者にも読まれた書物であった。しかし，それは，今日では，「省みられない古典」とされてしまっている。

そうした「省みられない古典」の「現代的意義」（本書の「帯」の言葉）を探ろうとする作業は，本来，難しい。「『共同体の基礎理論』を読み直す——共同性と公共性の意味をめぐって——」という本書の課題設定に即していえば，それは，『基礎理論』の読み直しそのものの作業と，『基礎理論』から出発して，今日における「共同性と公共性」の再建の可能性を構想する作業とに分裂していきがちであろう。

第1・2章の著者（黒瀧・荒井）たちは，現代日本農業の研究者である。その著者たちは，後者の作業をおこなっている。評者自身の現代日本農業の理解は，著者たちのそれとはかなり異なるが，著者たちの考え方は貴重な考え方である。しかし，そうした著者たちの叙述に，『基礎理論』が不可欠の「基礎理論」を提供しているかといえば，そうではない。著者たちの現代日本農業の理解なりその将来構想なりは，『基礎理論』とは独立に導ける。

一方，第3・4・5章の著者（渡辺・三品・飯田）たちは，それぞれ日本，中国，ドイツの農村史の研究者である。その著者たちは，前者の作業をおこなっている。しかし，その著者たちの叙述から，今日における「共同性と公共性」の再建という問題関心が鮮明に浮かび上がってくるわけではない。

こうした分裂状況は，著者たちの責任であるというよりは，極度に専門分化した，今日の社会科学の研究状況の正直な反映として，やむをえないものなのであろう。

しかし，一人の読者としては，編者でもある終章の著者（沼尻）自身が，第1・2章と第3・4・5章との「関連が理解し難かった」というままで，本書が，一般の読者に対して一冊の書物として提供されたことには，若干の疑問を感じざるをえなかった。

(2)　そこで，ここでは，本論の五編のうちから，「『共同体の基礎理論』を読み直す」という本書の主題に密着した第3・4・5章に限定して，評者の感想を簡単に述べたい。

評者は，第3・4・5章の叙述から多くのことを学んだ。それらは，この書評の読者が自らそれを読めば同意してもらえると思うが，いずれも明晰に書かれた力作である。

それら三編に共通することは，その著者たちによる今日の視点からする『基礎理論』の評価が，殊更に高いものではないということである。

第3章の著者（渡辺）は，他の著者たちよりは，

幾分か大塚に寄り添った議論を展開している。ひとまず大塚の分析視点を受容し，その視点によって，しかも今日の実証の水準に立って，日本の近世共同体の姿を概観した渡辺の論考は，本書の主題にもっとも端的に応えようとした論考であった。

しかし，その渡辺も，共同体論的な視角からの農村史研究の意義を指摘するものの，「大塚共同体論はもとより，共同体論自体が正面から取り上げられることがほとんどなくなってしまった」日本近世史学界の現状に，根本的な異議を唱えようとしているとは思えない。実証史家として，そうした『基礎理論』，ひいては大塚への関心の低下を，それなりに当然のこととして受けとめているのであろう。

一方，第 4・5 章の著者（三品・飯田）たちにとって，『基礎理論』なり大塚の近代化論なりは，自己の歴史像がいかにそれとは異なるかをしめす「倒立像」としては役立っているものの，大塚自身がそう自負した「史実の森に分け入ろうとする場合に携行すべき……地図」（『基礎理論』の「序論」）として役立っている訳ではない。

三人の著者たち，とりわけ若い世代に属する研究者である三品や飯田が，『基礎理論』の積極的な再評価にいたらなかったのは，究極的には，それには今日の実証の水準からすれば，十分な妥当性を見いだしにくいということによる。

社会科学は，その実証的な側面においては，研究の積み重ねがきくものであり，過去のものは過去のものとして有効性を減退させてしまうという宿命をもっている。したがって，本来，実証を目的とした書物ではない『基礎理論』――大塚自身は，それを，表題からも分るように，「経済理論の研究系列」（『基礎理論』の「はしがき」）に属するものとしている――を，実証の視点から，まして，その刊行後半世紀以上にわたる実証の積み重ねの上で読めば，大きな不満を感じるのは当然であろう。

しかし，「省みられない古典」を読み直してみたら，それは，やはり「省みられない古典」にとどまるべき存在だったということが，著者たちの評価の基調とされるなら，それが『基礎理論』に対する偽りのない今日的な評価であることには納得できても，一般の読者が手にする一冊の書物で提供するメッセージとしては，いささか弱かったのではないかという疑問も残ってしまう。

（3） そうした全般的な感想にも関連して，最後に，以上の著者たちへの具体的な注文や疑問を率直に述べておきたい。

① 共同体が，制度上の「村」の範囲ときっちりとは重ならず，さらに，水利用，山利用といった契機ごとの共同組織が，その構成員にズレをみせながら分散してしまっていたということが，中村吉治らが明らかにしたように，日本の近世以降の村落共同体の最大の特徴であったといえる。

渡辺には，そうした日本の近世以降の村落共同体のあいまいな姿そのものに，大塚の分析視点から切り込んでいけるのかどうか，という議論もおこなってもらいたかった。

② 大塚を，日本社会とアジア（中国）社会との共通性，ヨーロッパ社会との異質性を重視する〈ヨーロッパ ⇔ アジア（日本）〉型の日本認識の持ち主であったとする三品の議論には，異論をさしはさみうる。

紙数の制限はあったのであろうが，三品の論考では，「大アジア主義」者となった平野の日本認識＝講座派マルクス主義者の日本認識＝講座派マルクス主義の影響を受けた大塚の日本認識，という等式が前提されてしまっているようにも読めてしまう。

講座派マルクス主義者の，ヨーロッパ―日本―アジア（中国）という枠組みでの日本認識は，山田盛太郎の「農地改革の意義」（1948 年）などから端的に知りうるが，それは，三品の想定するものとはかなり異なっている。アジア的生産様式論・アジア的封建制論への傾斜がより強かった平野自身の本来の日本認識も，そのウイットフォーゲルへの批評（1933 年）にも見られるように，単純に〈アジア（日本）〉といえるものではない。

③ 大塚の近代化論を批判するのにドイツの経験を対置する飯田の議論は，イギリスの近代化過程を「典型」と捉える大塚の歴史像そのものへの批判を含意しているのであろう。

しかし，イギリスの近代化過程を「典型」と捉えることへの批判は，すでに戦前からあった。『欧州経済史序説』（1937 年）に見られるように，そうした野村兼太郎らの批判の存在を承知しながらイギリス＝「典型」論をとった，大塚の近代化論を有効に批判するには，イギリス＝「典型」，ドイツ（殊にエルベ以東のドイツ）＝「特殊型」とする，彼の歴史像の明示的な検討が欠かせなかったといえる。やはり紙数の制限はあったのであろうが，飯田には，大塚の歴史像の構成法そのものへの言及がもとめられたのではないだろうか。

なお，本書の著者に，大塚のホーム・グラウンドであり，その近代化論に素材を提供したイギリス農村史の専門家を欠いたことは残念であった。

寺出　道雄
（経済学部教授）